

「マネー・ボール(弱者の戦略)」

拝復。

ここ 2,3 日は梅雨の中休みのようです。今日は事務所に閉じこもりきりですが、一昨日の土曜日は年に



←本当においしかった^^

一回の「オープン・バブル」。要するにシャンパーニュ 好きが自分の好きなシャンパーニュを持ちより、青天井でランチをいただくと言うパーティ。今年は 20 人を超す参加、天気だけが心配でしたが、日頃の行いが良いせいでしょうか(笑)。大盛会でした。むしろ、暑さと日焼けに対するケアが必要でした。紫外線がもっとも強くなるこの時期、油断をしていますと、あっという間にトーストが出来上がります。皆様もお気をつけください。



マイケル・ルイス著 ランダム・ハウス講談社 1600 円(税別)

さて、今回のお題は「マネー・ボール」 うん？またサブプライム関連の話か、と思われるかもしれませんが、全く関係がありません。副題は「奇跡のチームを作った男」。メジャー・リーグのある GM のストーリーです。野球は分からないからなんて、言わないでくださいね。これはれっきとしたマーケティングの教材にもなりうる本です。「弱者の戦略」。話は、オークランドと言うアメリカ・カリフォルニア州に本拠地を置くアスレチックスというチームから始まります。この本はノンフィクションですが、少し前に発刊されたため、時間を 2002 年に引き戻さなければなりません。残念ながら日本人プレーヤーは出てきません。



オークランド・アスレチックス、なんとなく耳にした方もいらっしゃると思います。ワールド・シリーズ 9 回優勝、リーグ優勝 15 回、地区優勝 14 回と言うメジャーでも屈指の強豪チームです。最近でもリーグ優勝こそ遠ざかっているものの、2002、2003 年に地区優勝をしています。このチームにとっても特徴的なことがあります。選手の、**年棒総額がトップのヤンキースの 1/3 にしかならぬのに成績はいつも対等かそれ以上**なのです。ここで登場するのはビリー・ビーンと言う一人の GM です(写真がありませんでした)(T_T)。

まず、彼自身の生い立ちから、高校時代から華やかな「プレーヤー」で、当時としては破格の契約金でプロデビューを果たします。アメリカの場合は全てマイナー契約からのスタートです。**ルーキーリーグ→シングル A→ダブル A→トリプル A**と一つずつ階段を上って行かなければなりません。我々が普段見にし



←映画にもなりました。「メジャー・リーグ」

ているメジャー・リーグの選手たちは とんでもないエリート集団と言う事が言えます。ビーン自身は残念ながら 3 A とメジャーを行ったり来たりの選手でした。彼は早い引退からすぐに球団のスカウトに転進します。おそらく生涯、野球に関係する仕事をしたかったのだと思います。

ビリーがその長いスカウト人生を通じて昇格をし、次第に球団経営に関わる場面が多くなって行きました。彼がスカウトした新人たちが次々とメジャーに昇格し、活躍をしたからです。ビリー自身はスラッガーとして将来を託された存在でしたが、彼がスカウトしてくる選手はそういう選手ではありませんでした。スカウト会議ではいつも「邪魔者扱い」状態でした。彼がリストアップする選手はどのチームもノーマークの選手ばかり。「打率が低すぎる」「体が小さい」「速球に切れがない」「大学生だ」(高校生なら安くとれて将来楽しみだ)。孤軍奮闘です。彼は自説を曲げる事はしませんでした。長いスカウト歴を通じて他のスカウトとは違う視点を得るようになっていたからです。

ビリーが重視したのは「**出塁率**」！でした。特に四球を選ぶのが上手な選手を重視したのです。

普通、野手をスカウトしようと思えば、「打率」や「ホームラン数」「打点」を真っ先に見るのが今でも主流です。もっとも彼にとっても「長打率」だけはこだわりを持っていたようです。「**シングルヒットはピッチャーの責任ではない**」特にゴロで抜けていくヒットは単なる「運」だ(イチロー選手が読んだら怒るかもしれませんね)。ただし長打は違う、少なくともある程度以上遠くに飛ばす必要があり、ホームランに関しては、他のスカウトと同様に重視しています。ある程度以上の飛距離を飛ばすのは「才能」だと考えているからです。

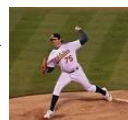
イチロー選手愛用のユンケルです→



同様に四球を選ぶことはヒットと同じ価値がある、と答えています。マリナーズのイチローは「**お客さんはボクが四球を選ぶのを見に来ているのではない**」と言い切り、四球が極めて少ない選手です。おそらくイチローが次のチームを探したとしても、アスレックスから声がかかる事はないでしょう。だって、哲学以前にお金がないんですから(笑)。

閑話休題。アスレックスはヤンキースやレッド・ソックスのような潤沢な資金がある球団ではありません。ですからメジャーでFA権を得た選手を大金で獲得する事は出来ません。他の球団が目をつけていない選手を安い金額(契約金)で指名し、メジャーで活躍させるしかないのです。メジャーの球団は選手との

同じくイチローさんがもっとも打ちにくい投手とほめました→



契約上 6 年間の保有権を持っています。たとえば、「バリー・ジト」というメジャー最上級のピッチャーがいます。その年俸は 2000 年に 20 万ドル、2001 年は 24 万ドル、2002 年は 50 万ドル(この年、ジトは**最優秀投手賞**を受賞しました(なんと、23 勝 5 敗)。アスレックスジトが 2006 年にチームを去るまでに極めて低い年俸でメジャー最高のピッチャーを保有する事が出来たわけです。もちろんジトはFA権獲得後、すぐさま他のチームに移籍をして行きました。アスレックスにはジトの年俸を支払うことが出来ないからです。そのかわり、その移籍で得た巨額の移籍金をまた、次の世代の選手たちをスカウトするために使うのです。一つの**ビジネスモデル**です。(日本で言えばカープでしょうか金本が抜け、新井が抜け、黒田が抜け。違うのは上位争いをしない)。カープファンの皆様、m(_ _)m。

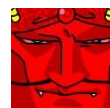
ジトは結局 2006 年にサンフランシスコ・ジャイアンツに、**13 億円の年俵で(当時最高額)**で移籍しました。皮肉な事に翌年から今年にかけて絶不調。今年も既にローテーションピッチャーからは外されたままです。ジトは大学生時代には全くと言っていいほどノーマークでした。しかし彼の投球フォームを見たビリーがその才能を見出しました。メジャーのピッチャーとしては屈指の遅さ(笑)である直球、これだけで他球団はジトを捕ろうとはしなかったのです。ビリーは彼のコントロールの良さとゴロを打たせることに優れていることを注目していました。既に述べたように「ゴロのヒットはピッチャーの責任ではない」「四球はヒットと同じだ」という哲学を持ってすればジトは最高のひろいものでした。

閣下、お久しぶりです(笑)。→

同様に現在ヤンキースで活躍中の「デーモン」



や「ジオンビー」



もアスレチクス

で若手時代を過ごしています。

ビーンがスカウト時代に**勝率と関係が深いデータを探り続けます**。結果は「**出塁率**」「**長打率**」だと言うことに気がつきます。結果的には後にOPS (on the base plus slugger) という概念が明らかになります。これは単純に出塁率と長打率を足しただけです(笑)。最近では試行錯誤の結果、出塁率に3倍をかけて長打率と足す。新OPSに落ちているようです。一般的にはこの数値が0.8で並みの打者、0.9で一流、1を超えると球界を代表する大打者とされているようです(ウィキペディアより)。ちなみに現在「ソフトバンク」の監督である王さんの場合、最高で**1.293(出塁率.532 長打率.761)**、生涯でも**1.08(出塁率.446 長打率.634)**だったそうです。メジャーではご存知「バリー・ボンズ」が最高で**1.422(出塁率.609 長打率.813)**と言うとてつもない記録を生んでいます。

四球はヒットと同じ、と考えるビーンですが、**四球を選ぶのがどうも選手の才能らしいと気がつきます**。おまけにこの才能には**スランプがほとんどありません**。相手ピッチャーからすれば嫌な存在ですよね。初球はまず振らない。打てる可能性がある球が来るまで、ひたすらカットしてファールにする。いわゆるメジャーのパワー野球とは異なります、まるで高校野球のようなプレイは楽しいかどうかはともかくとして。

ピッチャーに関しては本当に意味のあるデータは「**与四球**」「**被本塁打**」「**奪三振**」だとしています。**160キロの剛速球が投げられなくてもいいのです**。**アウトカウントを重ねる技術**

こそが大事だったわけです(ゴロを打たせる、肝心な場面で三振がとれる)。

ビリーの凄さはこの考えを徹底的に徹底する事です。ぶれない。

ビリーは野球を「**27個のアウトを取られるまでは終わらない競技**」と定義し、それに基づいて勝率を上げるための要素を分析しました(野球を統計学的手法をもって分析することをセイバートリクスと呼びます)。過去の野球に関する膨大なデータの回帰分析から「**得点期待値**」というものを設定して、これを上げるための要素を持つ選手を良い選手としました。具体的に言うと、出塁して長打で得点することが最も効率的である、としたわけです(ウィキペディアより)。

と、メジャーの敏腕GMであるビリーの紹介をしてきたわけですが、ちょっといたずらをして見たくなりました。そう、上記の原則が日本の野球にも当てはまるのか。今年はまだ結果が出ていませんので、昨年の結果を利用してみます。2007年度のセントラルリーグの結果と重要視票の相関を出して見たのです。


[セ・リーグ] <2007年:チーム別平均得点と打撃成績>


チーム	勝率	平均得点	打率	出塁率	長打率	OPS	新OPS	防御率	守備率
巨人	0.559	4.810	0.276	0.335	0.449	0.783	1.454	3.580	0.99
中日	0.549	4.330	0.261	0.338	0.387	0.725	1.401	3.590	0.987
阪神	0.529	3.600	0.255	0.319	0.368	0.687	1.325	3.560	0.998
横浜	0.497	3.950	0.265	0.324	0.400	0.723	1.372	4.010	0.983
広島	0.423	3.870	0.263	0.318	0.389	0.708	1.343	4.220	0.987
ヤクルト	0.417	4.140	0.269	0.331	0.409	0.740	1.402	4.070	0.983

セリーグ	勝率との相関
平均得点	0.41
打率	-0.01
出塁率	0.44
長打率	0.17
ops	0.24
新ops	0.34
防御率	-0.92
守備率	0.50

なんと、勝率と打率は無相関。出塁率が一番大きな相関を見せています。平均得点での相関では打率も高いのですが、長打率を加えた OPS、新 OPS に弱い相関を観察することが出来ます。防御率はすくければ少ないほどいいために逆相関がのぞましいのですが、見事なまでの逆相関。やはりピッチャーは大事ですね。当たり前か(笑)。守備率は評価が難しいので今回のコメントは差し控えます(守備がいいから難しい当たりをぎりぎりセーフにしたりする事があるからです)。いずれにしても、出塁率と低い防御率。



こう言うデータが素人でも作れるのに、あの在京のドーム球場のチーム  はまた、大砲をとりにくいのでしょうか(T_T)。今年のペナントはこれからですが、阪神が強いのは出塁率が高い1番(赤星)と長打率の高い3番(新井), 4番(金本)。ピッチャーは抜群のコントロールのウィリアムズ、球威の久保田・藤川。なんかもう決まったようなものかも(号泣)。でも、いいんですあの **天下の悪法「クライマックス**

ス・シリーズ  に、目標はとっくに移しております(笑)。中日の背中が見え、ヤクルトがそろそろ息切れしそうな今、序盤戦たっぷり休ませて置いたベテランを夏場から投入。2位になってクライマックス・シリーズに行きます。この辺、非常にむきになっています。クライマックス・シリーズと言う制度が大嫌いだからです。球団関係者、監督、コーチ、選手たち。こんな下らない制度に満足しているのですか?ペナントの価値を自らぶち壊すような制度を許せるのですか?プライドはないのか?

あつ、すみません。つい、感情的に^^;

資金がないなら、他球団と同じ事をしていても強くなることは出来ません。独自の視点でマーケットを見る事で、ビーンはアスレックスを強い球団に保っています。弱者の戦略と本人に伝えたら、あまりいい顔をしないかもしれませんが、見事です。次回は7月上旬。ではでは~(^_^) / ~ ~

ブログも毎日更新しています! (週休二日で) (笑)。 <http://rresearch.blog103.fc2.com/>

株式会社アール・リサーチ 〒271-0051 千葉県松戸市馬橋 1896-1 ヴィレッジ K・I 馬橋 3 F

Tel 047-342-3181 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp